

■ PCN だより

PCN Volume 64, Number 6 の紹介 (その 1)

2010 年 12 月発行の Psychiatry and Clinical Neurosciences (PCN) Vol. 64 No. 6 には, Review Article が 1 本, Regular Article が 6 本, Short Communication が 5 本, Letters to the Editor が 6 本, 掲載されている。今回はこの中から外国からの投稿された Regular Article 5 本と Short Communication 3 本の内容を紹介する。

Regular Article

1. Slow vs standard up-titration of paroxetine in the treatment of panic disorder: a prospective randomized trial

Buoli Massimiliano, Dell'Osso Bernardo, Bosi Monica Francesca, Altamura Carlo

Department of Psychiatry, University of Milan, Milan, Italy

パニック障害のパロキセチン治療における緩徐用量増加法と標準用量増加法について: 前向きランダム化試験

【目的】パニック障害患者は SSRI への感受性が高いと言われており, 治療には低用量での開始が望ましいとも言われている。本研究ではパロキセチンの緩徐用量増加法と標準用量増加法との間の有効性と認容性を検討した。【方法】一次治療施設での多施設オープンランダム化試験において, 60 名 (女性 44 名, 男性 16 名) の広場恐怖の有無にかかわらずパニック障害患者を登録し, 緩徐用量増加群 (2 日毎に 2.5 mg/日の増加) と標準用量増加群 (毎週 10 mg/日の増加) とに割りつけて最大 1 日用量 20 mg まで増量した。Panic Attack Anticipatory Anxiety Scale (PAAS) の各項目と Dosage Record and Treatment Emergent Symptom Scale (DOTES) とにより評価

し, 両群間の差異を ANOVA にて検定した。【結果】ANOVA 解析では有効性についても認容性についても両群間に差異を認めなかったが, Post hoc 解析では, 開始 9 日間の Panic Attack Anticipatory Anxiety Scale の下位項目「パニック発作の強度」についてのみ両群間で差異があり, 緩徐増加群でパニック発作の強度が低かった (treatment effect: $F=4.89$, $p=0.03$, effect size=0.1)。【結論】本研究ではパロキセチン治療の緩徐増加法では最初の 9 日間に限って有意性が認められたが, 最終時点では差異を認めなかった。

2. Hyperinsulinemia associated with overweight medicated bipolar patients during full remission

Kuo-Hsuan Chung, Shang-Ying Tsai

Department of Psychiatry, School of Medicine, Taipei Medical University, Taipei, Taiwan

完全寛解期にある肥満を呈する双極性障害患者と高インスリン血症

【目的】メタボリック症候群の前段階には高インスリン血症とインスリン抵抗性が見られる。薬物療法下の双極性障害患者は寛解早期に高インスリン血症を呈しやすい。我々は寛解期患者の早朝空腹時インスリンを測定し高インスリン血症となる要因について解析した。【方法】双極性 I 型の躁病期から寛解した患者 50 名について, 空腹時インスリン, 血糖, トリグリセリド, 総コレステロール, HDL コレステロール, LDL コレステロール, BMI を測定した。高インスリン血症群とそうでない群とに分けて比較検討した。【結果】15 名 (26.8%) が高インスリン血症を呈していた。BMI ($BMI \geq 24$) は, インスリン高値と関連を示していた。(オッズ比 8.57, $p < .01$,

CI=1.65-44.43)。【結論】双極性障害の寛解期患者の高インスリン血症は一般人口と比較して同等の頻度であった。しかしながら BMI の高い患者は使用している薬剤の種類によらず高インスリン血症になりやすかった。メタボリック症候群の前段階を予防するためには体重管理が重要である。

3. Dorsal hippocampal opioidergic system modulates anxiety-like behaviors in adult male wistar rats

Jalal Solati, Mohammad-Reza Zarrindast, Ali-Akbar Salari

Department of Biology, Islamic Azad University-Karaj branch, Karaj, Iran

背側海馬オピオイド系はラットの不安行動を調整する

本研究では、ラット背側海馬のオピオイド系の不安様症状に対する影響を、高架十字迷路を用いて検討した。麻酔下にてラット背側海馬 CA1 領域にニューレを装着した。1週間後にモルフィン (0.25, 0.5, 1, 2 μ g/動物), ナロキソン (2, 4, 6, 8 μ g/動物), エンケファリン (1, 2, 5, 10 μ g/動物), ナルトリンドール (naltrindole) (0.25, 0.5, 1, 2 μ g/動物) を投与し、ラットのオープンアーム滞在時間 (% OAT) とオープンアーム侵入回数 (% OAE) とを検討した。両側海馬 CA1 へのモルフィンは、OAT % と OAE % の低下を示し不安惹起作用が示唆された。オピオイド受容体拮抗薬であるナロキシソンの両側海馬への投与は OAT % と OAE % の増加を示した。 δ -オピオイド受容体アゴニストである [D-Pen^{2,5}]-エンケファリンは抗不安作用を示し、さらに δ -オピオイド受容体拮抗薬のナルトリンドールは不安行動を惹起した。これらの結果から、 μ -オピオイド受容体の活性化は不安を惹起し、逆に δ -オピオイド受容体の活性化は抗不安効果を惹起することが示唆された。

4. Serum ghrelin is inversely associated with cognitive function in a sample of non-demented elderly

Mary Beth Spitznagel, Andreana Benitez, John Updegraff, Vanessa Potter, Thomas Alexander, Ellen Glickman, John Gunstad

Kent State University, Kent, Ohio, U.S.A.

血清中グレリン値は高齢者の認知機能と逆相関を示す

【目的】オレキシン作用性ホルモンであるグレリンは動物実験では学習記憶との関係が示されているが、これまで非認知症の高齢者においてグレリン値との関係は示されていない。【方法】35名の非認知症高齢者について神経心理学検査を行い、血清グレリン値を定量した。【結果】血清グレリン値は言語記憶、作動記憶、呼称などの複数の認知機能成績と逆相関を示していた。【結論】グレリン値との関連を示した認知機能はアルツハイマー病初期に障害される認知機能とよく似ていたことから、グレリンの認知機能低下への病理学的な関与が示唆される。グレリンの作用機序について今後の検討が必要である。

5. Prevalence of metabolic syndrome in bipolar patients initiating acute-phase treatment: a six-month follow-up

Nianhong Guan, Hairen Liu, Feici Diao, Jinbei Zhang, Ming Zhang, Tingjuan Wu

Department of Psychiatry, Third Affiliated Hospital of Sun-Yat Sen University, Guang Zhou, China

治療急性期の双極性障害患者におけるメタボリック症候群の有病率について

【目的】南中国の双極性障害患者の治療急性期におけるメタボリック症候群の有病率について調査した。【方法】急性期気分症状を呈する双極性障害 148名と健常人 65名について、社会疫学的背景について比較検討した。患者群ではライフスタイル (飲酒, 喫煙, 運動など) と臨床症状を調べた。患者は薬物療法開始から 6カ月間フォローし、Chinese Medical Association Diabetes Branch Criteria によるメタボリック

ク症候群の有無を1, 3, 6カ月後に評価した。【結果】患者群における当初のメタボリック症候群有病率は11.5%, 肥満34.5%, 低HDLコレステロール15.5%, 高トリグリセリド29.1%, 高血圧14.9%, 高血糖5.4%であり, 薬物療法開始前は, 患者群では対照群と比較してメタボリック症候群の頻度が高く, 高血糖以外のすべての下位項目において有病率が高かった ($p < 0.05$)。回帰分析により高血圧の既往, 糖尿病の存在, アルコール摂取がメタボリック症候群と関連があった。観察期間を通して, メタボリック症候群と過剰体重の頻度は増加していたが, 高トリグリセリドと低HDLコレステロールは最初の1カ月で増加しその後は一定であった。【結論】以上の結果から, 中国人の双極性障害患者においてメタボリック症候群の頻度は有意に高いこと, 体重増加と脂質代謝異常は治療開始後の短期間で起こることが示され, 治療初期の体重増加と脂質代謝異常への介入の重要性が示唆された。

Short Communication

1. Gender difference in the association between adult ADHD symptoms and morningness-eveningness

Seung-Min Bae, Jong Eun Park, Yu-Jin Lee, In-Hee Cho, Jong-Hoon Kim, Seung-Hee Koh, Seog Ju Kim, Seong-Jin Cho

Department of Psychiatry, Gachon University of Medicine and Science, Incheon, Republic of Korea

成人ADHDの朝型・夕型との関連における性差について

成人期におけるADHDと朝型・夜型との関連性について検討した。SCID-IVにより他の精神疾患のないADHD ($n=344$) にMorningness - Eveningness Questionnaire (MEQ) とAdult Self-Report Scale for ADHDとを施行した。MEQはADHD症状とネガティブな相関を示した ($p < 0.0001$)。男性においては不注意と多動衝動性はMEQとの関連を示したが ($p=0.01$)、女性においては不注意だけがMEQと相関を示した ($p < 0.001$)。この結果から, 夜型の生活パターンは成人ADHDの不注意と強い相関があ

ること, 男性においては多動衝動性とも関連があることが示唆された。

2. Relationship between obstetric complications and neurological soft signs in Tunisian patients with schizophrenia

Amel Mrad, Anwar Mechri, Hela Slama, Sana Mokni, Mondher Lettaief, Lotfi Gha

Research laboratory "Vulnerability to psychotic disorders", Department of Psychiatry, University Hospital of Monastir, Monastir, Tunisia

チュニジアの統合失調症患者に見られる産科的合併症と神経学的ソフトサインとの関連

チュニジアの統合失調症患者における産科的合併症の既往 (OCs) と神経学的ソフトサイン (NSS) との関係を明らかにすることを目的とした。46名の患者についてNSS scale (Krebs, et al.) とMcNeil-Sjöström scaleにより産科的合併症 (OCs) とを評価した。産科的合併症の有無により, 神経学的ソフトサインの程度に差異はなかったが, 産科的合併症全スコアと運動の協調と統合の下位項目については逆の相関関係が示されたことから, 産科的合併症は統合失調症の遺伝的リスクを高めることが示唆された。

3. Probable variant Creutzfeldt-Jacob disease in Asia—A case report from Taiwan and review of prior two cases

Chih-Wen Yang, Jong-Ling Fuh, Shuu-Jiun Wang, Jiing-Feng Lirng, Chih-Chao Yang, Shih-Jung Cheng

Department of Neurology, Neurological Institute, Taipei Veterans General Hospital, Taiwan

変異型クロイツフェルト・ヤコブ病—台湾の初症例とアジアの2症例との比較—

変異型クロイツフェルトヤコブ病 (vCJD) は1996年に英国で見出され, 狂牛病との関係が言われている。本報告では台湾のvCJD第一例を報告する。34歳男性で1989~1997年の間英国に在住していた。患

者は抑うつ・焦燥・性格変化・下肢の疼痛・痛覚過敏で発症し，歩行障害と認知障害が認められた．脳波で定型的な PSD は見られず，CSF の 14-3-3 蛋白増加もなかった．脳 MRI の FLAIR，T2 協調，拡散画像で両側尾状核，左レンズ核，両側背内側視床枕に強信号を認めた．プリオン遺伝子解析では 129 コ

ドンは Met/Met であった．患者は 16 カ月で無言無動となり 28 カ月で死亡した．以上の患者所見は vCJD と一致しており WHO の probable CJD 診断基準を満たしていた．この症例に加えてアジアから報告されている vCJD 2 症例の特徴とを比較した．

(文責：武田雅俊 PCN 編集委員長)
